

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告（四）

藤井由紀子  
花 栄



## 〔調査報告掲載にあたって〕

岐阜県各務原市の西巖寺には、同寺の前任職であり、龍谷大学で教鞭をとった中国仏教史学者、小川貫式（以下、貫式と略す）の関係資料が残されている。貫式は特に大蔵経研究で知られ、その生涯を通して蒐集した経典類の断簡や、間接的に譲り受けたものながら、西巖寺が所属する浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派、もしくは、西本願寺と略す）の法主、大谷光瑞の探検隊が将来した敦煌文書断簡など、現在、同寺には一部の研究者間ですでに着目されている資料のほか、和書を含む膨大な量の書籍や自筆原稿の数々が蔵されている。

さて、これらの西巖寺所蔵の資料のうち、本報告で調査対象としているのは日中戦争に関わるもの約千五百点である。<sup>①</sup> 実のところ、貫式には大学院修了直後、中国に留学した経験があり、しかも、昭和十四年（一九三九）四月から昭和十七年（一九四二）三月にかけて、日中戦争から太平洋戦争へと、戦局がまさに拡大しようとする時期に、興亜留学生として本山から派遣され、戦時下の中国に渡っているからである。ただし、その多くは原稿の下書きや覚書のような自筆メモ、そしてアルバムに貼付された写真類である。ともすれば単なる遺品と見なされてしまいがちなこれらを、歴史の「史料」として価値づけ、活用する方途を開くにはどうしたらよいか。同朋大学仏教文化研究所では、二〇一六年度以降、当該資料に関心を持つ数名で調査チームをつくり、<sup>②</sup> これらを「小川貫式

資料」と命名して研究プロジェクトを立ち上げ、歴史学の立場から分析を進め、その史料性について仮説を立てて検証を重ねてきた。<sup>③</sup>

当然のことながら、歴史学は過去に起こった事象を、「史料」に基づいて解明していく学問である。過去の歴史を正しく復原する材料として、「史料」という形で諸資料を価値づけていくことは、すべての歴史学者にとつての最重要課題だといって過言ではない。そして、そのために、過去の事象を解明しうるだけの証拠能力がどの程度あるか、信憑性を中心に資料を吟味する、史料批判という手続きをとるわけであるが、昭和十年代に作成された「小川貫式資料」の場合、偽文書の可能性もある古代や中世などのケースとは違い、信憑性という観点よりも、公的な利用価値について吟味することが、これらを「史料」として残していくためには必要となるのではないか。そう考えている。以下、この点に留意したうえで、これまでの研究成果を踏まえつつ、「小川貫式資料」の史料性について、二つほど具体的に示しておきたい。

まず、ひとつは、戦時下における学術調査の実態を解明する史料としての価値である。貫式は中国留学時代の前半を、本願寺派の中国人僧侶養成機関であった南京仏学院の講師として過ごした後、<sup>④</sup> その職を辞して山西省太原を中心に学術調査に着手している。貫式本来の興味に基づいて、大蔵経関係のものを主な調査対象とし、<sup>⑤</sup> 実際、大蔵経についてはいくつかの新しい発見もあったようであるが、<sup>⑥</sup> 昭和十七年（一九四二）三月には龍谷大学に正式な職を得たことで帰国の途についており、わずか

一年足らずの非常に短い期間で行われた調査の内容は、たとえば貫式とほぼ同時期、同じく山西省において東方文化研究所（京都大学人文科学研究所の前身）の水野清一と長廣敏雄が行った雲岡石窟調査などに比すると、規模やその学術的意義において遠く及ばない、と言わざるをえない。しかし、それでもなお、「小川貫式資料」に「史料」としての価値を見出そうとする理由は、当時、多くの研究者が戦時下の中国で調査活動に携わった、そうした研究者たちをめぐる社会的な環境を具体的に示してくれるものが、ここには含まれていることに注目しているからである。すなわち、貫式のような中国仏教史の研究者に限らず、占領地となった中国のあらゆる情報を収集するという軍部の方針に関わって、戦地ではさまざまな分野の研究者が学術調査に携わっていたのであり、貫式の場合であれば、太原の崇善寺での大蔵経調査に関して、陸軍特務機関から資金と物資の援助を受けていたこと、特務機関員として陸軍に所属した菊地宣正（菊池宣正とも表記。真宗大谷派開教使<sup>6</sup>）とともに経典調査にあたったこと、その菊地機関員を通して経典調査の経緯が特務機関に逐一報告されていたこと、調査終了後に調査報告書を特務機関に提出していたことなど、貫式が作成した報告書の下書き等を通して、寺院での経典調査であるにもかかわらず、その背後に驚くほど政治的な動きの存在したことが知られるのである。<sup>7</sup>

また、昭和十六年（一九四一）六月から約一ヶ月間、貫式は同じく山西省にある五台山で調査を行っているが、その頃、五台山では陸軍特務

機関が新民会（日中戦争後に日本軍が樹立した中国臨時政府を擁護するために設立された中国民衆教化団体）を従え、山内最大の宗教行事である六月大会の復興を、中国人僧侶や日本人研究者を交えつつ精力的に推し進めており、果たして「小川貫式資料」中には、当時、特務機関が六月大会復興に際して作成配布した印刷物類が散見する。重要なことは、それらによって「宗教文化工作」、或いは「仏教工作」と呼称された、日本軍による五台山での宣撫工作の内容が明らかになることで、複数民族の交差点である五台山という仏教の聖地を、東亜新秩序という当時の日本が掲げた、新しいアジア構想具現化の舞台として利用しようとしていたことや、その工作に、軍人のほか、日中双方の僧侶、学者、経済人がどう連なり、どう協力し合っていたかを、具体的に知ることができるのである。<sup>8</sup>

近代戦争が国家利益をかけて行われる侵略行為である以上、占領先の情報を収集する目的で、研究者が現地にも動員され、軍の全面的な支援を受けて学術調査を行い、その成果が軍部に蓄積されることは、戦時下ではむしろ当たり前のように行われていたことだといつてよい。研究者もまた時代に規定された歴史的な存在にすぎないのであり、日中戦争に限らず、近代の学問そのものが、こうした近代戦争と密接に結びつきながら発展してきた面のあることは、やはり熟考しておかなければならない学史上の問題のひとつだと思う。本研究プロジェクトでは「小川貫式資料」を通して戦争と学問との関係にきちんと向き合い、その上で近代学問の客観性・実証性の質そのものを問い直していく、その領域に踏み込

む覚悟をもって貫式が残した資料類の史料性検証を続けていきたい、と考えている。

次に、「小川貫式資料」の史料性について、二つめの点は、本願寺派による中国開教の史料としての価値である。開教というのは、近代以降、日本式の仏教を海外の地に新たに根付かせることを目的とした布教活動で、政府の占領政策のもと、宣撫工作の方法として戦時下では特に奨励された。そして、本山から興亜留学生として派遣された貫式もまた、上海で西本願寺上海別院の輪番であり、本願寺派の中南支布教総監・開教総長であった小笠原彰真と会い、その指示によって占領後まもない南京に所在した南京出張所（後の南京別院、南京西本願寺とも表記<sup>9</sup>）の駐在員となり、さらには同派の開教事業の柱のひとつとして開設された、中国人僧侶養成機関である南京仏学院の講師に着任し、職を辞するまでの約二年間、ここで中国人青年たちの指導にあたったのである。

ただし、中国に限らず、近代以降の仏教各派による海外開教の具体相については、現在までにすぐれた先行研究が蓄積されており、近代仏教史や近代教育史、或いは植民地政策といった観点から、榎本瑞生編『日本仏教団（含基督教）の宣撫工作と大陸』（第九巻以降は大東仁との共編<sup>10</sup>）や、中西直樹解題による『戦前期仏教社会事業資料集<sup>11</sup>』など、近年には影印刊行という形で関係資料そのものの公開も識者の手で着々と進められている状況にある。それに対して「小川貫式資料」の開教関係資料は、貫式の所属した本願寺派の開教事業に限定してみても、公的な内容を持

つものほほとんど含まれておらず、専従であった南京仏学院についても、たとえば昨年度の報告において「小川貫式資料」を補充する比較資料として取り上げた「亀谷法城資料」、すなわち、南京仏学院開設から講師をつとめた貫式と同僚、亀谷法城が残した資料に比すると、貫式のそれは残念ながらごく部分的なものにとどまってしまっている。

しかし、それでもなお「小川貫式資料」に注目する理由は、貫式をはじめ、本山から中国に派遣された興亜留学生たちに期待されていた役割が、学術調査との連携も含めて、本願寺派の中国開教事業に学術知識をもって寄与することではなかったか、との示唆に富むからである。たとえば、「小川貫式資料」中のメモ類から、中国留学時の貫式の研究テーマは、関心を寄せていた大藏經に関するものではなく、「東亜近代仏教の歴史的研究」と題された中国仏教の実態調査を内容とするものであったことがわかるし、<sup>12</sup>南京仏学院についても、ここで講師を勤めるかたわら、仏学院が開設された古林寺の歴史について調べ、執筆したものが同資料中には残っており、また、それらがパンフレットや新聞記事という広く人口に膾炙した媒体であることから推して、中国仏教についての歴史的理解を深めることで、中国において日本式仏教を広めていく、その足がかりをつくることに貫式が役を買っていたことがわかるのである。

すなわち、今しがたも述べたように、本願寺派が運営する南京仏学院は、南京城内の西康路にある古刹、古林寺の境内に開設されたが、貫式によると、この古林寺には開創者である如馨古心の霊瑞をもって権威づ

けられた「天下第一戒壇」があり、それゆえ戒律専門の寺として他の寺院とは区別される特異な寺院であったこと、その戒壇では「放戒」という授戒行事が年に二回行われており、それは南京占領後も途絶することなく行われていたこと、さらに、古林寺の戒壇には褚民誼（汪兆銘政權の外交部長）や陳羣（同政權の内政部長）といった、占領後、新たに成立した南京国民政府の親日派の要人たちが居士として大きく関与しており、褚民誼が「天下第一戒壇」という大額を揮毫していたことや、陳羣が清時代の爆発事故で破損した戒壇を復興していたことが、この寺の特筆すべき歴史として紹介されている<sup>14</sup>。いうまでもなく、仏教寺院にとつて戒壇とは、戒を授けられた出家者が僧尼となる場であり、ごく一部の寺院にのみ設けることが許された特別な空間であるが、特に古林寺の場合、中国有数と賞嘆された戒壇を持ち、かつ、放戒という授戒行事がそこで連綿と続けられてきた伝統を持つ寺院であったことを、貫式が改めてクローズアップしていることは、僧侶養成という仏学院の設立意義を考えると、興味深いものがある。実際、仏学院の最初の学生を募集するにあたっては、古林寺住職の薦めにより、放戒に参加した者のなかからまず十名ほどが選ばれたのである<sup>15</sup>。

近代以降、日本仏教各派によって進められた中国開教、これは中国の人々を日本式仏教の信者として獲得することを目指したものであったが、目標や意欲だけが空回りし、その内実は在留日本人を対象とした布教にとどまるものであったことは、すでに先学たちによって明らかにさ

れている通りである。そのような状況のなか、南京仏学院を新たに立ち上げるに際し、南京の古刹に古くからある伝統的な授戒行事の歴史を拾い上げ、その伝統を換骨奪胎して日本式僧侶の輩出につなげていこうとしたことは、非常に画期的な試みだったといつてよい。そして、そうした中国仏教と日本仏教との橋渡しの役割を、興亜留学生として派遣された若き貫式が果たしていたのである<sup>16</sup>。このように、「小川貫式資料」の開教関係資料からは、中国仏教史の専門家としての学術的知見に裏打ちされた形で中国仏教の現状を把握し、それを換骨奪胎して開教事業につなげるという、日中戦争下に派遣された西本願寺の興亜留学生のたちの役割の一端が見えてくる。「小川貫式資料」中には調査メモとおぼしきものが無数にあるが、本研究プロジェクトでは、今後、それらをこうした観点から評価し直してみる必要があるのではないかと考えている。

以上、これまでの調査成果・研究成果を踏まえつつ、「小川貫式資料」の史料価値について、学術調査と開教事業という二つの面から述べてきたが、古林寺の例に見るように、これら二つの面は分ちがたく結びついていくことがわかる。そして、「小川貫式資料」の史料性検証を引き続き進めていくにあたっては、この双方の面を見据えたうえで、当該資料自体の分析だけでなく、「小川貫式資料」以外の資料とつきあわせてこれらを位置づけていくこと、および、これらが作成された中国の事情を勘案してその価値をはかることが、これからの課題となっていくだろう、と思われる。



この点、前者については、本願寺派以外の仏教各派の資料や、外交関係の公文書等にも比較対象を広げたいと考えているものの、「小川貫式資料」の資料数の多さから本格的にはまだ着手できていない状況にある。しかし、本年度より真宗大谷派名古屋教務所が主宰している「平和展」の学習会に参加し、西本願寺との共同活動も多かった東本願寺のアジア開教の諸相について、関係資料を俯瞰する機会を持てたことは、本研究プロジェクトにとって大きな刺激となった<sup>17)</sup>。たとえば、同派の宗報である『真宗』の記事を丹念に見ていくなかから、特務機関員として貫式とともに太原や五台山で活動した菊地宣正の動向を報じた記事に行きあたりなど、「小川貫式資料」を補完するいくつかの具体的な事実を拾い上げることも可能となった。同学習会参加への便宜を図ってくださった新野和暢氏、そして、この新野氏を含め、学習会において貴重なご助言をくださる大東仁氏、両氏には心から感謝を申し上げます。

また、後者については、「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫式の記録より」というテーマで、二〇一八年度の日本学術振興会科学研究費の助成事業に採択されたこともあり<sup>18)</sup>、少しずつ海外にも調査の範囲を広げつつある。もちろん、予算も限られており、十分な調査が行えるわけではないが、昨年度と今年度にかけて、貫式の北支における学術調査の拠点であった中国山西省太原と、本願寺派の中国開教の拠点であった上海での現地調査を行うとともに、比較研究的視座から朝鮮の開教史跡での調査を行っており、特に太原調査

を通して「小川貫式資料」の史料性について第三の可能性、すなわち、太原の近代史を復原する史料としての価値が出てきたことは、本研究プロジェクトにとって大きな進展であった。なお、この太原調査については、本報告内で別稿を準備して、その調査の概要報告と、本資料をめぐる海外調査の問題点を提起するつもりである。

(文責藤井)

## 注

(1) 千五百点という資料点数は、アルバムとスクラップブック計六冊に

貼付された写真や絵葉書などを一点として数えた場合の数である。

(2) 西厳寺蔵「小川貫式資料」については、同朋大学仏教文化研究所を

母胎として、歴史学(古代・中世・近代)、仏教学(日本・東洋)など、

当該資料に興味を寄せる研究者の協力を得て、過去四年間にわたって

分析調査を進めてきた。各年度の調査メンバーは以下の通りである

が、メンバーは必ずしも固定的ではない。二〇一六年度：小川徳水、

工藤克洋、高木祐紀、中川剛、藤井由紀子。二〇一七年度：大艸啓、

小川徳水、花榮、北村一仁、工藤克洋、高木祐紀、中川剛、新野和暢、

日比野洋文、藤井由紀子。二〇一八年度：小川徳水、花榮、梶浦晋、

北村一仁、中川剛、日比野洋文、藤井由紀子。二〇一九年度：小川

徳水、花榮、中川剛、日比野洋文、藤井由紀子(以上、すべて五十

音順)。

(3)

この検証の過程で得られた知見については、問題提起も含めて、論文・

史料翻刻・史料リストの形でまとめ、『同朋大学仏教文化研究所紀要』

に「特別調査報告」として以下のように掲載してきている。藤井由

紀子・中川剛・高木祐紀・小川徳水・工藤克洋「特別調査報告 西

厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(一)」、『同朋大学仏教文化研究所

紀要』第三十六号、平成二十九年三月。藤井由紀子・小川徳水・北

- 村一仁・大帥啓・工藤克洋・高木祐紀・中川剛・新野和暢・花栄・日比野洋文「特別調査報告 西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(一)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十七号、平成二十九年十二月)。
- 藤井由紀子・小川徳水・中川剛・日比野洋文「特別調査報告 西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(三)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十八号、平成三十一年三月)。さらに、二〇一六年度、および、二〇一八年度には、同朋大学のギャラリーで関連する展覧会を開催し、問題を人口に膾炙するような工夫も試みている。『戦時下の中国仏教研究Ⅰ西厳寺蔵「小川貫式資料」と山西省調査記録』(『同朋大学仏教文化研究所』平成二十八年十二月)、『戦時下の中国仏教研究Ⅱ石壁山玄中寺復興と「小笠原宣秀資料」』(『同朋大学仏教文化研究所』平成三十年七月)。
- (4) 貫式は南京においても棲霞山や報恩寺で大蔵経関係の調査を行っていたようで、「小川貫式資料」のうち、南京関係のものには、新発見の断簡について言及したメモが含まれている。
- (5) 『朝日新聞』北支版の昭和十六年(一九四一)九月二十七日号には、「仏教史上の大発見 五台山にかくれたる経文など 日華提携に貴重な資料」という見出しで、太原の上村特派員が、崇善寺において貫式が經典類十一点を新たに発見したことを報じているほか、南京では棲霞山で大明南蔵の殘典を発見したことを、貫式自身が「大明南蔵始末攷」と題されたメモに書き残している。
- (6) 貫式とともに崇善寺の經典調査にあたったのは、真宗大谷派(東本願寺)の開教使で、陸軍特務機関の機関員でもあった菊地宣正である。菊地は五台山に駐留して活動したらしく、五台山でも貫式と行動を共にしている。また、大谷派の宗報である「真宗」は、日本仏教頭揚の資料を求めるために菊地が一時帰国した際、大谷大学で「五台山を語る」と題して講演をしていたことなどを伝えている(『五台山駐留の菊池開教使帰る』、『真宗』第四六一号、昭和十五年一月)。なお、菊地がどのような事情で機関員となったかについては、今のところ資料がなく不明である。
- (7) 高木祐紀・小川徳水・藤井由紀子「史料紹介」西厳寺蔵「小川貫式資料」より太原崇善寺調査関係資料(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月)。
- (8) 藤井由紀子「五台山六月大会の復興と日中戦争―「小川貫式資料」にみる五台山」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月)。
- (9) 本願寺派の南京出張所は、南京占領の翌年にあたる昭和十三年(一九三八)、太平路白菜園の地に開設されたが、その後、在留日本人の増加をうけて中山東路上乗巷に移転、昭和十七年(一九四二)には別院に昇格している。
- (10) 槻木瑞生ほか編『日本仏教団(含基督教)の宣撫工作と大陸』第一巻(第十六卷(龍溪書舎、平成二十四年)〜平成二十年)。なお、第九巻以降は槻木瑞生・大東仁の共編。
- (11) 『戦前期仏教社会事業資料集成』(不二出版、平成二十三年)〜平成二十五年)。
- (12) 昭和十二年発行の『南京仏学院概況報告』や、昭和十七年発行の『南京仏学院一覽』などが、亀谷法城の自坊であった山口県熊毛郡田布施町にある明楽寺には残されていた(小島勝・木場明志編『龍谷大学仏教文化研究叢書Ⅲ アジア開教と教育』、法蔵館、平成四年三月)。
- (13) 藤井由紀子・小川徳水・中川剛「小川貫式資料報告(三)」、『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十八号、平成三十一年三月)。
- (14) 小川貫式「東亞近代仏教の歴史的研究」(西厳寺蔵「小川貫式資料」、昭和十四年頃)。
- (15) 藤井由紀子「古林律寺と南京仏学院―西厳寺蔵「小川貫式資料」南京関係資料をめぐって」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十八号、平成三十一年三月)。
- (16) 昭和十四年十二月、南京の日本居留民会のなかに、若き居留民たちの結束を目的として南京青年会が設立されたが、その青年会の発行誌、『南京青年』の第二号には、南京仏学院の院長をつとめた横湯通之が、仏学院開設当初の苦勞話を寄せている。それによると、仏学院の初回応募者を古林寺の放戒に参加した者のなかから選んだが、学力等に問題があることから、後に特務機関を通して管内の寺院か



(16) ら数名を選んで補充人員に充てたという(横湯通之「大和」—中国青年僧と伍して—、『南京青年』第二号、昭和十五年二月)。

『南京青年』の横湯の寄稿文には、次のように、南京仏学院開設に関して貫式への期待を吐露した部分がある。「南京青年会々員である小川貫式君が京都の龍谷大学史学研究科を出てすぐかけつけて呉れたので、古林寺に放戒(中国僧尼の授戒会)が始まったのを幸ひに彼等の寺廟生活調査傍々宿り込みで学院開設は可能か仕うか研究してもらったのです」(注15横湯前掲寄稿文)。

(17) この「平和展」は、過去三十年にわたって近代戦争下における大谷派の活動を厳しく問い続けてきた伝統ある展覧会であり、その中枢を担う「平和展」学習会は、大東仁、新野和暢といった近代開教を専門としてきた研究者をブレンとしており、学ぶところも大きい。

(18) 「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト—興亜留学生小川貫式の記録より」(日本学術振興会科学研究費 基盤研究C 課題番号18K00917 二〇一八—二〇二〇年度 研究代表者藤井由紀子)。

## 西巖寺蔵「小川貫式資料」と中国（一）——山西省太原における動向を中心に——

藤井 由紀子・花 栄

### はじめに

岐阜県各務原市の西巖寺に残されている諸資料のうち、小川貫式（以下、貫式と略す）という中国仏教史学者が残した日中戦争期のものを、「小川貫式資料」と命名し、研究プロジェクトとして資料整理と分析研究とに着手したのは四年前のことになる。これまでの具体的成果については『同朋大学仏教文化研究所紀要』に連載してきた過去三回の調査報告<sup>①</sup>および、本報告の「調査報告掲載にあたって」を参照していただきたいが、研究プロジェクトの主眼とするところは首尾一貫、「小川貫式資料」を歴史資料（史料）としてどう活かすか、というその一点にある。そして、本研究プロジェクトでは、そのために三つの試みに取り組んできた。

まず、ひとつは、「小川貫式資料」の公開である。この「小川貫式資料」は、貫式が浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派、もしくは、西本願寺と略す）の興亜留学生として中国に派遣された際、蒐集、或いは作成したものである。したがって、資料を公開していくにあたっては、閲覧者が限定的になる出版物という形ではなく、画像データベースを構築し、Web上で公開していくことで、中国の人々にも広く閲覧が可能になるような形を選択した。この点、資料の所蔵者である西巖寺住職の小川徳水氏<sup>②</sup>は、資料公開について肯定的な立場であり、早い段階から全面的公開の許可をいただけたことは、研究プロジェクト推進の大きな力となっている。なお、「小川貫式資料」は約百五十点あまりの資料群であるが、写真や諸資料を細かく貼りこんだアルバムとスクラップブック類が計六冊あ

り、一冊につき百点から三百五十点の写真類が貼付された、これら貼付資料を一点の資料として扱うと、資料総数は千五百点を超える。むしろ、写真類は文字資料にはない情報を持つ。時間のかかる作業ではあるが、これらの公開を可能にするべく、現在、プロジェクトメンバーである中川剛、日比野洋文の両名により、貼付資料一点一点の高精細撮影とデジタル画像化を進めている。<sup>3)</sup>

二つめは、比較資料の発掘である。「小川貫式資料」の史料性検証のために、同時代に同環境で作成された別の資料と比較することは、調査研究上、必須の手続きであるが、そうした観点に加えて、本研究プロジェクトでは、貫式と同時代に日中戦争下、學術調査等に携わった関係者の関連資料を発掘することに努めている。「小川貫式資料」がそうであったかもしれないように、場合によっては、史料の価値が見いだされぬまま、遺品としてそれらが廃棄されてしまう可能性があるからである。これまで「小笠原宣秀資料」(小笠原宣秀・龍谷大学教授・中国仏教史学者)<sup>4)</sup>、「亀谷法城資料」(亀谷法城・明楽寺住職・本願寺派開教使・南京仏学院講師)<sup>5)</sup>、「岩上先天資料」(岩上先天・北京美術学校教授・長野某寺住職)<sup>6)</sup>を調査対象としてきたが、ただし「小笠原宣秀資料」と「亀谷法城資料」については、研究者により、一部その存在が注目されていたものではあり、厳密には埋もれていた資料とは呼べない。

そして、三つめが海外調査である。当然のことながら、「小川貫式資料」はそのほとんどが戦時下の中国で蒐集され、作成されたものであり、貫

式の中国における足跡を実際に辿ることで、これら資料類の背景と環境とを確認することを目的に現地調査を行っている。より具体的には、「小川貫式資料」中に記録された、貫式が調査した經典、および、新たに発見したという經典類の現状確認を行うことと、画像データベースの公開に向けて、特に写真資料の付帯情報を増やすこと、この二点に軸足を置いて調査を進めている。ただし、貫式が中国で活動した時期は昭和十四年から十六年にかけてであり、日本敗戦を経て、国共内戦、文化大革命など、その後の中国では大きな混乱がいくつも起きており、文化財はもちろん、国全体が日中戦争当時とはかなり様変わりしていることは否めない。加えて、近年、中国の経済成長は地域の姿をさらに大きく変えている。しかし、当時と何が変わり、何が変わらないのか、その状況認識の有無は、「小川貫式資料」の公開の質に必ずや違いをもたらすはずである。本研究プロジェクトでは、そのような見通しのもと、資料に基づいて可能なかぎりの現地調査を行いたい、と考えている。<sup>7)</sup>

なお、今年度は貫式の北支における學術調査拠点であった山西省太原と、本願寺派の中国開教拠点であった上海での現地調査を、藤井由紀子と花栄の二名とで実施し、「小川貫式資料」と関係する施設や場所の現状確認を行った。<sup>8)</sup>以下、本稿では、この中国における調査、特に山西省太原での調査成果報告を交えつつ、貫式と中国との関係、そして、「小川貫式資料」と中国との関係を考察してみたい。

## 一 「小川貫式資料」と中国―資料群の分類

自筆原稿とメモ書きのほか、アルバムやスクラップブックで構成される「小川貫式資料」であるが、特にこれらアルバム類の中には、写真や絵葉書、新聞記事の切り抜き以外に、中国留学時の私信や切手、中国紙幣、切符、そして関係各所で入手したと思われる名刺やレジュメ、パンフレット等が丁寧に貼りこまれているものがあり、貫式が身を置いた当時の状況を具体的に復原できることが、当該資料の大きな特徴のひとつとなっている。以下では、中国調査について述べるに先立ち、まずは貫式の中国での足跡に即して「小川貫式資料」を地域ごとで分類し、その内容を簡単に示しておくことにしたい。

まず、最初に、南京に関する資料群、約六十五点（アルバム貼付資料を一点として数えると約八百点）<sup>⑨</sup>が挙げられる。この南京関係資料は、昭和十四年（一九三九）四月、西本願寺の興亜留學生として貫式が南京へと派遣された、その南京逗留時代のものである。その当時の南京は、昭和十二年（一九三七）十二月、日本軍による首都南京の陥落を経て、昭和十五年（一九四〇）三月には汪兆銘を中心にした親日政権としての南京国民政府が樹立するという、大きな政治的動きのなかにあった。そして、西本願寺の南京出張所（後の南京別院<sup>⑩</sup>）の駐在として南京入りした貫式は、昭和十四年（一九三九）七月に開学した本願寺派運営の中国人僧侶養成機関、南京仏学院において教鞭をとることになり、仏学院が置かれた古

林寺境内で中国僧らと起居生活をともにしながら、仏学院の講師として約二年間の日々を送ったのである。したがって、「小川貫式資料」中の南京資料群もまた、以上のような貫式の南京での生活を反映して、古林寺関係のものを含む仏学院関係の資料と、その職務のかたわら棲霞山や報恩寺に足を運んで大蔵経関係の調査を行った<sup>⑪</sup>、学術調査関係のものに大別でき、資料形態は自筆の調査メモのほか、アルバムとスクラップブック計四冊に貼付された写真、絵葉書、紙媒体（仏学院開業式・卒業式の招待状など）といったものが中心となる。なお、南京については現在までのところ未調査であるが、今年度末に古林寺跡や棲霞山など、詳細な現地調査を行うことを予定している。

ちなみに、「小川貫式資料」には、なぜか上海関係のものがほとんど含まれていない。南京逗留期、本願寺派による開教事業の中核機関が置かれ、地理的にも近い上海には出張することもしばしばあったと思われるが、アルバム中には上海とおぼしき風景が写っている写真は見当たらない<sup>⑫</sup>。なお、貫式の渡航直前、昭和十四年（一九三九）二月、上海では軍の特務部が中心となって、中国における宗教工作の推進を目的として中支宗教大同連盟が発足するなどの動きをみせていた<sup>⑬</sup>。この点、「小川貫式資料」中には、「日華仏教連盟結成総会並大会秩序表<sup>⑭</sup>」という、中支宗教大同連盟の管轄下にあったとみられる南京の仏教連合組織、日華仏教連盟の謄写版刷りのプリントがあるが、現在までのところ、これ以外には開教事業のメインストリームと関わる資料類を見つけない。

とはできていない。

次に、北京関係のものが挙げられる。ただし、これは南京資料と同じアルバムに貼付された写真が数点ある程度で、資料群と呼べるほどのものではない。点数が少ないため、情報も限られてくるが、おそらくこれらは南京仏学院の職を辞して後、しばらく北京に滞在して山西省調査の準備を進めていた期間のものと考えられる。たとえば、写真の中には天安門広場で何かしらのセレモニーが行われていた様子を写したものなどもあり、興味をひく。今後は現地調査も視野に入れつつ、「小川貫式資料」以外の資料とつきあわせ、それら写真類の内容を解明していきたい、と考えている。

さらに、山西省関係の資料群、約五十五点（スクラップブック貼付資料を一点として数えると約四百点）<sup>16</sup>が挙げられる。昭和十七年（一九四二）六月、貫式は北京から山西省に入り、省都である太原市中心部に所在した太原出張所（貫式は「太原西本願寺」と表記しており、本論でも以下では太原西本願寺の称を用いる）を拠点に調査を行った、その時のものである。主な調査先は市内の崇善寺と五台山であるが、五台山関係の資料には、同山の大藏経についてまとめた自筆原稿や調査メモのほか、同年六月に行われた第二回五台山六月復興大会に関するものが、スクラップブックに貼付された形で相当数残されており、五台山という仏教聖地を舞台として行われた宗教文化工作の具体的な内容が知られるという点、このスクラップブックは「小川貫式資料」中でも特段に高い史料性を持つてい

る、と本研究プロジェクトでは考えている。<sup>17</sup>

また、山西省資料群ではもうひとつ、太原市内の崇善寺大藏経に関する調査報告書類が注目される。すなわち、軍の特務機関のバックアップのもと、寺内経蔵に散乱していた宋・元時代の磧砂版大藏経を、貫式らが調査を兼ねて整理し、失われぬよう保護処置を施したうえで蔵に納め直した際の記録類（下書き）で、貫式による経典類十一点の新たな発見もあったという。<sup>18</sup>なお、この貫式が発見した経典類は、崇善寺に隣接する太原博物館に保管されることになり、これらの伝存状況を現在確認中であるが、一方、貫式らが保存に努めた崇善寺の大藏経は今もなお同寺に蔵されている可能性が高く、貫式の崇善寺での調査活動は、大藏経研究という観点からだけではなく、文化財保護という観点でも非常に意義深いものであった、と評価できる。そこで、今年度はこの太原の崇善寺での大藏経調査を試みたいと考えていたが、この崇善寺をはじめ、五台山など、中国の寺院を対象とした経典調査については困難があり、いまだ課題多き状況にある。この点については、次章で改めて触れてみたいと思う。

## 二 山西省太原における小川貫式の足跡

### ——太原西本願寺・崇善寺・太原博物館

中国山西省にある太原は、日中戦争当時も、現在も、山西省の省都で

ある。明から清時代にかけて活躍した山西商人の例にみるように、山西省はもともと経済的に発達した土地柄であったが、五台山出身の軍閥、閻錫山のもと、省都太原は近代商都としてさらに大きく栄えることになった。昭和十二年（一九三七）十一月九日、その太原を、日本軍はいわゆる太原作戦によって攻略した。日中戦争の引き金となった盧溝橋事件発生から四ヶ月後、太原府城をめくり、閻錫山率いる国民政府軍と攻防戦を繰り返した結果、日本軍が太原を占領したのである。

「小川貫式資料」によると、貫式が北京を発つて太原入りしたのは、昭和十六年（一九四一）六月三十日で、これは日本軍の太原占領から四年後のことになる。この間、山西省陸軍特務機関は、先の攻防戦で破壊された太原市街の復興を図るべく、道路建設、河川修復などの土木事業に力を入れただけでなく、日本人進出による人口増加を見込んで、新市街地の建設計画を策定するなど、都市整備に向けての準備を着々と進めていった<sup>20</sup>。

さて、貫式は、太原到着後すぐに、太原における本願寺派の開教拠点、太原西本願寺に入っている。そして、ここで四泊したのち、同特務機関の主導のもとで開催される第二回復興六月大会に参加するため、五台山へと向かったらしい。『五台聖境』と題された、新民会発行の五台山のガイドブックが「小川貫式資料」中には含まれているが、「五台山参拝途徑」という挿図に貫式自身による書き込みがあり、これによって山西省入りした貫式の足取りを知ることができる。すなわち、昭和十六年（一

九四一）六月二十七日に北京を発ち、太原西本願寺に逗留したあと、七月三日に五台山入口である代県に到着、翌日には五台山の中心街となる台懷鎮に入ったものとみられる。また、「小川貫式資料」には、その際に購入した「華北交通自動車券」も残されていて、そこに捺された「崞県―陽明堡―代県―繁峙―沙河鎮―茶房子―望海峯―台懷鎮」という経路スタンプから、太原駅から列車で崞県駅まで行き、そこから先はバスを使って五台山入りしたことがわかる<sup>22</sup>。なお、七月十二日には大同の雲崗石窟へと向かっているが、再び五台山に戻ったようで、顕通寺に駐在していた酒井眞典（真言宗僧・密教学者・陸軍特務機関員。以下、酒井と略称す<sup>23</sup>）、菊地宣正（真宗大谷派開教使・陸軍特務機関員。以下、菊地と略称す<sup>24</sup>）の案内で、五台山各所を巡って調査を行い、七月二十四日に五台山を離山して太原に帰っている。その後、同月二十六日から九月三日まで市内崇善寺での大藏經調査に携わっているが、貫式が残した崇善寺調査の報告書によると、そのきっかけは酒井・菊地の両名が同寺で宋・元時代の磧砂版大藏經を発見したことにあつた<sup>25</sup>といいい、おそらく五台山から貫式に同行したのであるろう、崇善寺經の発見者の一人であり、陸軍特務機関の機関員でもあつた大谷派の開教使、菊地とともに經典調査を行い、かつ、これらが失われぬよう、その整理・保存に努めている<sup>26</sup>。さらに、崇善寺調査の合間を縫って、市街外れの双塔寺や郊外の晋祠にも足を運んでいたことが、残された写真の内容からはわかる。

そして、五台山と崇善寺、この二ヶ所を主とした貫式の山西省調査で



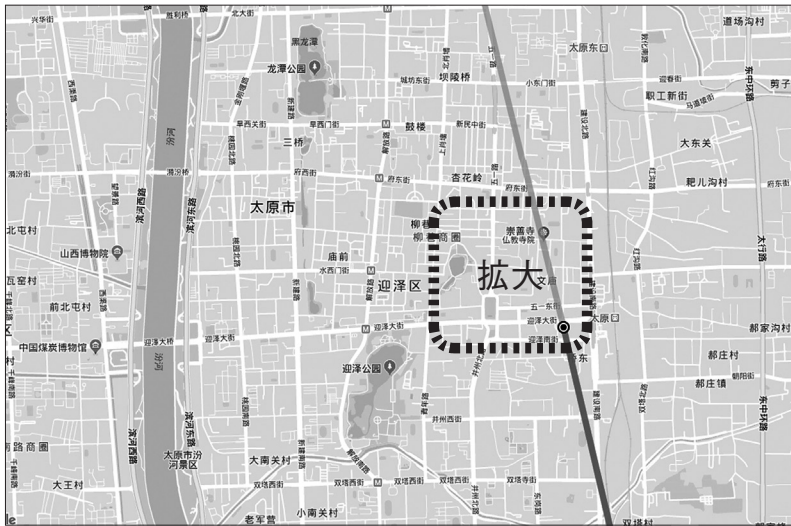
は、大藏經に関する発見もいくつかあったようである。すなわち、『朝日新聞』北支版の昭和十六年（一九四一）九月二十七日号は、「仏教史上の大発見／五台山にかくれたる経文など／日華提携に貴重な資料」という見出しをつけ、特に崇善寺において貴重な発見があったことを報じており、この記事によると、新たに発見された十一の經典類は太原博物館に保管されることになったという<sup>(27)</sup>。

以上が、「小川貫式資料」から知られるかぎりの、山西省における貫式の足跡である。これらのうち、本年度の研究プロジェクトでは、「小川貫式資料」の調査研究の一環として、太原市内での調査を実施した。具体的には、貫式が数ヶ月間、起居した太原西本願寺を起点に、諸資料と諸研究を参照にしつつ、貫式の行動に沿って主要な場所の踏査を試みた。以下、その踏査結果を踏まえて各所の位置関係を確認すると、次のようになる。

まず、太原西本願寺についてであるが、戦後にまとめられたものながら、本願寺派の海

〔挿図1 太原市街図〕 出典…華北交通アーカイブ作成委員会「華北交通アーカイブ」  
華北交通の旧太原駅の位置が示されているため本図を引用したが、各駅間を最短距離で結んだものらしく、●で示された駅の位置以外、路線ルートについては正確に示したものではない（当図では文廟や崇善寺境内を線路が貫いていたように見えるが、おそらくそうではない）。

（上）図

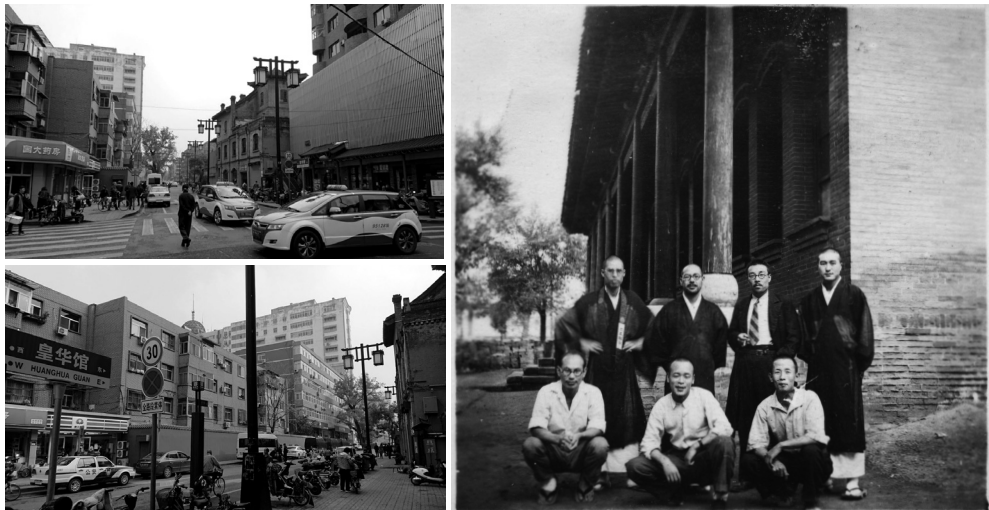


（下）図／拡大図



外開教拠点を示した『海外開教要覧』によって、当時の住所は「太原市皇華館街六号」であったことが判明する<sup>29)</sup>。現在、この布教所はその跡すら残っていないが、皇華館という地名は今でも使われており、その場所は旧太原府城の域内に含まれることから、太原西本願寺は市の主要部に置かれていた、と考えてよい。また、これを太原駅から見た場合には、駅の北西、距離にして約六百〜七百メートルのところになり、駅からも至近の、市街地の中心部ともいべき絶好の場所に西本願寺があったことがわかる。ちなみに、貫式が利用した頃の太原駅（華北交通同蒲線）は、現在の太原駅よりも三百メートルほど南西、太原城首義門外の南官坊にあったことを付言しておく。

右に示した挿図は、京都大学地域研究統合情報センターを母胎に発足した、華北交通アーカイブ作成委員会が構築した「華北交通アーカイブ」から引用したものである。華北交通の鉄道駅を既製のweb地図上に再現したものであるが、本稿ではそこに若干の加工を加えてある。すなわち、上図に「拡大」として点線で一画を囲んでいるのは本稿によるもので、この拡大したエリアに太原西本願寺、崇善寺、太原博物館（文廟）がすべて含まれる（下図はこの上図の拡大エリアを抜き出して示したもの）。あくまでも現代の地図であるが、太原西本願寺以外は、今もなお場所を変えずに存続しており、戦争下と現在との地理的な異同を大まかに把握することができる。たとえば、上図の電車マーク<sup>30)</sup>のところが現在の太原駅であるが、ここを起点として西方向、五一広場を経て汾河方面



〔挿図2〕 太原西本願寺の今昔比較

右：西本願寺前で撮影された記念写真（前列向かって右端が貫式）

左：西本願寺のあった皇華館の現在の街なみ

向かって左上の写真中央の古建築は皇華館9号楼という太原市の文化財指定建造物で、清時代に提督学校としてこの地に建てられたものである。

へ、東西にまっすぐ走る迎沢大街という大通りが旧太原府城の南限、つまりは南北に長い長方形をした城域の下辺にあたり、この大通りのすぐ北側のエリアに太原西本願寺のあった皇華館（拡大地図では交通銀行すぐ下に「皇華館」と街路名が小さく書かれている）、太原博物館（現在は山西省民俗博物館）、崇善寺がすべて収まり、これらは徒歩で往来できる非常に至近距離に所在していたことがわかる。

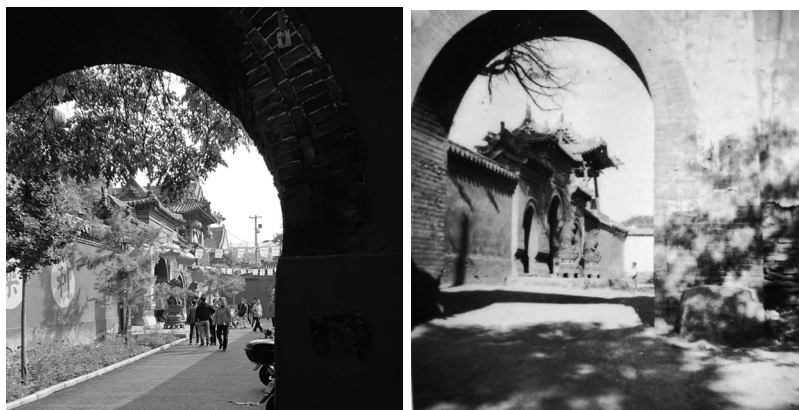
なお、「小川貫式資料」中には太原の東本願寺について言及したものは無いが、皇華館街のすぐ西隣には文瀾公園があり、これは日中戦争時には新民公園と呼ばれ、中華民国十五年（一九二六）頃、この公園の北に建てられた太原仏教会館が太原東本願寺の前身であると、本願寺派の開教使、高原一道（本願寺派太原出張所在勤・陸軍特務機関員。以下、高原と略称す<sup>33</sup>）が、『本願寺新報』に寄せた「念仏に蘇へる／北支山西省」という記事のなかで述べている。すなわち、高原によると、中華民国九年（一九二〇）、代県から太原に来た昌修という僧が開化寺に留錫し、坐禪念仏を始めたところ、その高風を慕って人が集まり、わずか五年足らずの間に念仏に帰依する者が太原人口の約一割にまで及んだということを紹介しつつ、その念仏信仰の高まりをうけて新築された太原仏教会館が東本願寺の前身であったという<sup>34</sup>。また、従軍僧として太原に入城した大谷派の開教使、井上淳念によると、昭和十二年（一九三七）十一月二十七日、御正忌を契機として太原東本願寺は創立されたといい、さらに同派では太原大谷学園（日語科・支那語科・家政科）を建設して興亜教育を

展開したという<sup>35</sup>。ちなみに、先の高原は、菊地と同じく特務機関員でもあり、藤谷道威（本願寺派太原出張所主任。以下、藤谷と略称す<sup>36</sup>）とともに、開教のための施策として太原で念仏運動を展開していたほか、宗教工作の一環として日本の浄土系三宗派（浄土宗・本願寺派・大谷派）が力を入れた、太原郊外の玄中寺復興にも深く関わっていた人物である<sup>37</sup>。玄中寺の御膝元ゆえ、山西省の中国民衆には念仏信仰の素地がある、というのが高原たちの言い分<sup>38</sup>で、特務機関や新民会、山西省管路局など、日本の関係者の念仏信仰が、そこに重なるという太原での現況を顧みて、高原は念仏を介した日中のつながりこそは大東亜共栄圏の基礎を形成するものだ、と公言している。さらに、当時、この玄中寺復興と関連して、同寺の調査を精力的に進めていた中国仏教史学者として、道端良秀（大谷大学教授・大谷派僧侶。以下、道端と略称す）の名を挙げねばならないが、道端もまた、玄中寺をはじめとする学術調査活動を、太原東本願寺を拠点に行っていたらしい<sup>40</sup>。

以上を総じて、太原の東西両本願寺は、軍の特務機関と密接につながりながら、開教事業だけでなく、仏教系の研究者たちが調査を行うための学術拠点としても機能していたことがわかる。皇華館一帯は明清時代には貢院という科挙の試験場が置かれていたところで、その流れをうけて、山西省初の大学、山西大学が発祥するなど、近代以降も文化・教育の一大ゾーンであったが、そこに開設された東西両本願寺でも、研究者や開教使たちが東西の枠を超え、協力しながら山西省内の学術調査を

着々と進めていたのである。

このように、本研究プロジェクトでは、「小川貫式資料」の内容に基づいて、太原市において現地調査を行い、当時、貫式が身を置いた環境を丁寧にひとつひとつ確認していったが、もうひとつ、今回の太原調査の目的とするところは、崇善寺の経典類の現状を確認する、そのための足掛かりを作ることにあつた。崇善寺について記された書は決して多くはないが、事前に文献調査を行った結果<sup>①</sup>、貫式らが調査し、保存に努めた大藏經と思しきものが、現在も同寺に蔵されている可能性の-highいことが想定できたためである。むろん、実際にそうであるなら、貫式らの事績は、占領下の文化財保護という視点からも意義深いものとなり、崇善寺における大藏經の確認調



〔挿図3〕 崇善寺の今昔比較 右：貫式撮影写真、左：藤井撮影写真

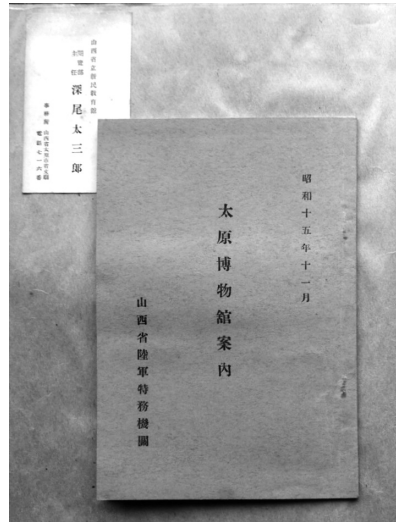
査の実現は重要な成果のひとつとなるはずである。しかし、中国寺院における本格的な調査は然るべき人物からの紹介がないと実現が難しく、そうした人脈を持ちえていない本研究プロジェクトとしては、山西省仏教協会など、人を介して各方面に打診を試みているものの、早急に事が運ぶという状況にはいまだ至っていない。そこで、今回は經典調査実現への布石として、「小川貫式資料」のうち、崇善寺関係の画像を持参し、大藏經に関して現状確認調査が可能かどうか、直接、崇善寺を訪れて尋ねてみるということをし、苦肉の策として計画した<sup>②</sup>。

ところがである。実際に崇善寺を訪れてみると、「小川貫式資料」中の写真にもある大殿は、数年間の計画で修理中の状態で、また、その覆いかかった大殿では、修理中にもかかわらず、法要が延々と続けられ、大殿はむろん、境内も真摯に合掌する信者であふれかえっており、カメラを持って境内に立ち入ったわれわれに常に注がれる冷たい視線のなか、当該寺院においてアポイントメントなしに調査の交渉をするなど、微塵の余地もないことを思い知らされる結果となった。敢えて書くが、門外には大勢の物乞いの人々がおり、小鉢を差し出しながら参詣者たちの後を追いかける光景がしばしば見られ、寺院外観の撮影のためカメラを構えれば、脇から袖をつかまれ、鞆をつかまれ、信仰が現在もお強く生きている寺院というものの姿を、そのような形でも実感させられることとなった。

しかし、一方で大きな成果があつたのは、この崇善寺に隣接する旧太



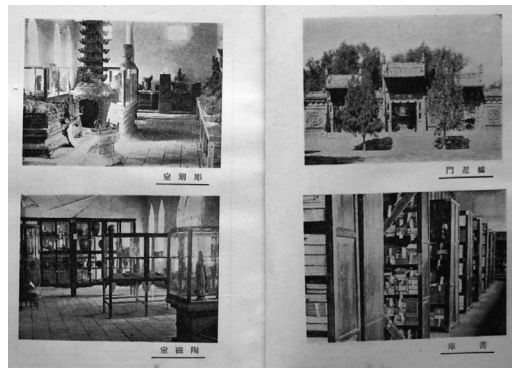
原博物館、現在の山西省民俗博物館である。先にも触れた、貫式が崇善寺で発見した十一の經典類が保管されることに



〔挿図4〕 山西省陸軍特務機関発行『太原博物館案内』

なった、と報じられていた文化施設である。この博物館は、中華民国八年（一九一九）十月、太原の文廟内に開設された山西省教育図書博物館を濫觴とし、山西公立図書館、山西省立民衆教育館と名称を変え、昭和十二年（一九三七）の太原占領以降は日本軍の管理下に置かれた施設である。「小川貫式資料」中には、昭和十五年（一九四〇）発行の『太原博物館案内』というパンフレットが含まれているが（挿図4）、冒頭には山西省陸軍特務機関長の植山英武による「はしがき」があるほか、「山西文化保護会設立趣意書」なる一文を含む、博物館の沿革もそこには記されていて、その内容から当時、博物館を管理したのは陸軍第九師団（山岡部隊）内に設置された山西文化保護会で、会長は師団長でもある山岡重厚、以下、図書部幹事に井波信一、美術部幹事に寺前為一、自然科学部幹事に深尾太三郎（以下、深尾と略称す）が就いていたことがわかる。

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告（四）



〔挿図5〕 太原博物館の今昔比較

右：『太原博物館案内』挿図 左：現在の太原博物館（山西省民俗博物館）挿図向かって右上の門はそのまま現存するほか、挿図左上に見える銅製の七重塔も現在屋外に陳列されている。

なお、深尾は植山特務機関長の「はしがき」にもその名が登場し、深尾の働きによってこの『太原博物館案内』の上梓をみた旨が述べられている<sup>(4)</sup>。その後、同年十二月、博物館は山西省公署に返還され、親日派政権の管理する施設として再スタートすることになり、名称も山西省立新民教育館に変更された。館長には山西省公署教育庁秘書長の張範が就任し、実務を司る主任には日本人二名、すなわち深尾と俵重秋がその職に就き、博物館運営にあたったようである。なお、この新民教育館の開館式典は昭和十六年（一九四一）四月二十七日、貫式が太原入りする直前に行われており、貫式が入りしたのは、正確にはこの新民教育館時代の博物館であったとみてよい。「小川貫式資料」中の『太原博物館案内』には「山西省立新民教育館／閲覧部主任 深尾太三郎」という名刺も添えられているほか、崇善寺の調査記録にもしばしば深尾の名が登場しており、學術調査を通して両者間に深い交流のあったことが知られる<sup>(5)</sup>。

では、この博物館に保管されることになったという貫式発見の経典類は、その後、どうなったのであろうか。当然のことながら、昭和二十年（一九四五）の終戦以降、博物館の管理も再び変遷をみている。すなわち、山西省立民衆教育館という旧称が復活して国民政府の管理下に戻り、一九四九年十月、中華人民共和国として新しい中国が建てられて以降は山西省図書博物館となり、一九五三年からは山西省博物館として運営されてきた。その場所は文廟内で変更はなかったが、近年、二〇〇四年になって汾河の西岸に場所を変え、山西省博物院という形で新しい立派な省立

の博物館が開設されたことで、その所蔵品も多く移動をみたものと考えられる。一方、文廟内の博物館は現在、山西省文物局が所管する山西省民俗博物館となり、展示内容も民俗を中心としたものに変更されて現在に至っている。貫式が逗留した時代の建物はほぼそのまま残っており、『太原博物館案内』の挿図写真に掲載された文物も、ごく一部ながら同館に残されているが（挿図5）、終戦後の博物館の変遷の歴史を鑑みると、貫式発見の経典類について追跡調査を行うことは、山西省博物院との交渉も視野に入れねばならず、決して簡単ではないことは容易に想像がついた。

そこで、今回の太原調査では、崇善寺と同様、まずは旧太原博物館であるこの民俗博物館に、『太原博物館案内』をはじめ、当時の太原に関する資料を画像として持参し、今後の調査に向けてのアドバイスをもらう、という計画を立てた。対応をしてくださったのは、当該博物館の陳列部主任の安海氏である。この安氏は博物館学を専門とする研究者で、持参した資料に対し、近代太原史研究の観点から多大な興味を示していた。研究の視座から「小川貫式資料」の史料性をめぐって、活発に情報交換をする時間の持てたことは実に幸甚であった。すなわち、「小川貫式資料」中の太原関係の資料は中国には残っていないもので、今後、太原の文化財史を編纂する際には貴重な情報源となるであろうこと、また、当該博物館には占領時代のものと思われる日本人関係の資料が未整理のまま残されており、日本語であることからこれを整理する見通しも



ついていないことなど、情報交換を進めるなかから、「小川貫式資料」との関連も含めて、日を改めて同館所蔵の占領時代の未整理資料を本格的に調査させていただく約束を取り交わした。<sup>(46)</sup> それだけではなく、貫式が発見した経典類の追跡調査についても、現在この博物館に該当するものはおそらくないが、可能性のある山西省博物院に問い合わせる窓口となる、との言葉をいただくこともできた。もちろん、具体的な成果が出るのは、次回と同館での調査後となるが、日中戦争時の資料類を史料として活かしていくために、このような人的つながりを海外の研究者と結べたことは、ひとえに貫式が残した「小川貫式資料」という、史料の力であると考えている。それを共有してくださった安海氏には、心よりお礼を申し上げたい。<sup>(47)</sup>

以上、「小川貫式資料」の内容に基づいて太原で現地調査を行った、その調査成果報告を兼ねた形で考察を行ってみた。なお、今回の調査では、貫式が崇善寺調査の合間に訪れた晋祠の踏査も試みる予定であった。しかし、太原市の南西に位置する晋祠の延長線上には、「小川貫式資料」の比較分析資料として「小笠原宣秀資料」を用いた際に考察した玄中寺がある。しかも、この玄中寺は貫式と交流した道端や高原との関連の深い場所でもあり、急遽、汾河に沿って当時の行程をたどりながら、玄中寺に足を延ばし、その帰路に晋祠に向かう予定としたところ、日没を迎えてしまい、晋祠の踏査は叶わなくなった。また、太原市内では太原駅から二キロメートルほど南東に位置する双塔寺の踏査も残されている。

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(四)

次回、山西省民俗博物館での調査の際に、晋祠の踏査を試みたい、と考えている。

## おわりに

本稿では、「小川貫式資料」が中国で作成、もしくは、蒐集された資料であることに基づいて、中国において貫式の行動に沿った形で現地調査を行った、その報告を兼ねた形で当該資料の考察を進めてみた。なお、今回の調査では上海も訪れ、本プロジェクトに協力していただける中国人研究者を獲得するため、プロジェクトの趣旨説明などの時間に多くを割いたが、そのかわら、上海市虹口区乍浦路の上海西本願寺跡（建物現存<sup>(48)</sup>）や、中支宗教大同連盟に関連して虹口区黄浦路にある上海アスターハウス（現在は金融博物館）などを踏査している。しかしながら、上海での踏査内容は南京との関連が強い。いずれ南京調査の報告と併せて、上海での踏査内容を報告したいと考えている。

## 〔謝辞〕

今回の調査を通して、「小川貫式資料」のような、内容が日本と中国とにまたがり、かつ、戦争という事項を含む近代の資料について現地調査を行う場合、学問の普遍性に基づいて本研究の意義を理解し、その上で協力をしてくださる中国の研究者の方々の存在が不可欠である、とい

うことを改めて痛感した。内蒙古社会科学学院蒙古语言文字研究所所长の薩日娜氏、中国科学院工業陶磁研究センター研究員の包山虎氏、そして、山西省民俗博物館陳列部主任の安海氏、以上の方々には貴重な時間を割いていただき、意見交換をしながらいろいろと学ばせていただく機会と、今後の協力に関する言とを頂戴した。心からお礼を申し上げたい。

注

- (1) 藤井由紀子・中川剛・高木祐紀・小川徳水・工藤克洋「特別調査報告 西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(一)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月)。藤井由紀子・小川徳水・北村一仁・大艸啓・工藤克洋・高木祐紀・中川剛・新野和暢・花栄・日比野洋文「特別調査報告 西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(二)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十七号、平成二十九年十二月)。
- (2) 藤井由紀子・小川徳水・中川剛・日比野洋文「特別調査報告 西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(三)」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十八号、平成三十一年三月)。
- (3) 小川徳水氏は小川貫式の長男であり、西巖寺の現住である。また、調査二年目となる二〇一七年度からは本研究プロジェクトの参加メンバーとなり、「小川貫式資料」についての問題を共有している。
- (4) 「小笠原宣秀資料」約四十点(アルバム貼付の写真を一点として数えた場合は約四二二点。ただし、別に未勘定のバラ写真あり)。これらについては、二〇一七年度、広島大学敦煌学プロジェクト研究センターの白須浄眞氏の全面的なご支援により比較資料研究に着手した。
- (5) 「亀谷法城資料」約六十点(アルバム貼付の写真を一点として数えた場合は約五三六点。これらは新潟大学の柴田幹夫氏、龍谷大学の野世英水氏が、関係者の許可を得て、法城の自坊であった明楽寺(山

口県熊毛郡田布施町)の住居スペースから発見したものを、両氏に相談のうえ、比較資料として紹介した。また、明楽寺に残された南京仏学院関係の資料(『南京仏学院概況報告』『南京仏学院一覽』)については、小島勝氏が開教資料としてすでに研究活用している(小島勝「本願寺派開教使の日本語教育」、小島勝・木場明志編著『アジアの開教と教育』龍谷大学仏教文化研究叢書Ⅲ、龍谷大学仏教文化研究所、平成四年三月)。

(6) 「岩上先天資料」約五百点が、昨年度、遺族のもとから発見された。これらは全くの新出資料である。画稿と拓本類が大半を占めるが、千曲川洪水によって被災しており、資料の状態は必ずしもよくない。岩上先天は、「小川貫式資料」中に登場する人物で、貫式の五台山調査や崇善寺の經典調査の現場にいたことがわかっているが、今回の新出資料の発見により、東京美術学校卒の日本画家で、大谷派の僧籍を取得後、日中戦争時には北京美術学校の教授として中国で作画活動をしてきたことや、文化工作の一つとして北京で開かれた「興亜美術展覧会」に関与していたことなどが判明した。

(7) 昨年度は、比較調査として韓国調査を実施した(十月三日〜十一月四日)。その理由は、韓国には東西両本願寺の開教拠点であった布教所の建物が、現在でも文化財として現存するからである。具体的には、日本統治期の朝鮮半島の諸問題に詳しい長石正道(本願寺派浄徳寺住職)、荒木潤(韓国学中央研究院)、両氏の協力を得て、ソウル、群山、釜山など、各所で実地踏査を試み、特に木浦と慶州の旧布教所では内部まで見学することが可能となった。両氏には心より感謝申し上げたい。

(8) 二〇一九年十月十日から十七日まで、貫式の北支における學術調査の拠点であった山西省太原と、本願寺派の中国開教の拠点であった上海、この二ヶ所を中心に現地調査を実施した。調査メンバーは藤井由紀子と花栄(内蒙古社会科学学院言語文字研究所研究員・同朋大学仏教文化研究所客員所員)の二名である。ただし、今回の調査は五台山調査、および、南京調査に向けての準備のための予備調査であり、上海と呼和浩特において中国の研究協力者との打ち合わせに

時間を割く必要があり、山西省では五台山は除き、太原とその近郊に調査範囲をどめることとした。なお、花栄は中国語のほか、モンゴル語にも通じており、山西省地域を含む中国調査を効率的に行っている。

(9) 南京関係の「小川貫式資料」にはアルバム・スクラップブック類が四冊含まれている。これらに貼付された、写真、絵葉書、紙幣、切手などを一点として数えた場合には、総点数が約七六二点となる。なお、総じて「小川貫式資料」の点数に「約」をつけておおよその数を示しているのは、資料形態によって点数の数え方が定まっていなないものがあるためである。

(10) 本願寺派の南京出張所は、南京占領の翌年にあたる昭和十三年（一九三八）、太平路白菜園の地に開設されたが、その後、在留日本人の増加をうけて中山東路上乗巷に移転、昭和十七年（一九四二）には別院に昇格している。

(11) 「小川貫式資料」のなかに含まれる「日華仏教連盟結成総会並大会秩序表」という謄写版刷のプリントの裏に、棲霞山で大明南蔵の一部を発見したことを書きつけた、「大明南蔵始末攷」というメモ書きがあるが、このときに発見された經典残闕がその後どうなったかについて言及したものは、残念ながら同資料中からは今のところ見つけられていない。

(12) 「小川貫式資料」中の写真すべての場所が特定できているわけではなく、撮影場所が不明のものが数十点ほどある。これらについては現在調査中である。

(13) 松谷暉介「日中戦争期における中国占領地域に対する日本の宗教政策―中支宗教大同連盟をめぐる諸問題―」（『社会システム研究』第二十六号、平成二十五年三月）。新野和暢『皇道仏教と大陸布教―十五年戦争期の宗教と国家―』（社会評論社、平成二十六年二月）。

(14) 「日華仏教連盟結成総会並大会秩序表」（西厳寺蔵「小川貫式資料」、印刷年不明、昭和十四年四月か）。なお、本願寺派の中南支布教総監・開教総長にして、上海別院の輪番であった小笠原彰真は、同連盟仏教部の委員をつとめている。

(15) 日華仏教連盟は昭和十四年（一九三九）四月、南京に進出した日本仏教各宗派（本願寺派、大谷派、浄土宗、日蓮宗、本門本法華宗、曹洞宗）が組織した日華仏教連合会を中枢として、南京仏教会をはじめとする中国側の仏教団体（蒙蔵章嘉事務所・西蔵班禪駐京弁事処・中国安清同盟）が加盟してできた連合組織で、本部は南京に置かれた。（注13松谷氏論文。中川剛「新出の西厳寺蔵「小川貫式資料」について」、『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月）。

(16) 山西省関係の「小川貫式資料」にはスクラップブック一冊が含まれている。これに貼付された資料類を一点として数えた場合には、総点数が約四一七点となる。

(17) 藤井由紀子「五台山六月大会の復興と日中戦争―「小川貫式資料」にみる五台山」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月）。

(18) 高木祐紀・小川徳水・藤井由紀子（『史料紹介』西厳寺蔵「小川貫式資料」より太原崇善寺調査関係資料」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月）。

(19) 太原の居留民に対する日本人学校として、昭和十六年（一九四一）に太原高等女学校、昭和十七年（一九四二）には太原中学校が開校している。

(20) 徳永智「日中戦争下の山西省太原都市計画事業」（『アジア経済』第五十四巻第二号、平成二十五年六月）。徳永氏によると、昭和十三年（一九三八）に中国臨時政府内に建設総署が置かれ、昭和十四年（一九三九）九月の時点で、北京・天津・濟南・太原・石家荘・徐州・新郷の七都市をはじめ、華北の主要地数ヶ所で、新市街地建設などの都市計画が図られたが、戦争の進展より経済状況が悪化したことで、都市計画そのものが見送られるなか、太原は閻錫山を帰順させんと

いう政治的な事情から、陸軍特務機関によって「対伯工作」（閻錫山懐柔工作）の一環として都市計画が実行に移され、上下水道や公共施設の建設など、インフラ整備が進められていったという。

(21) 『五台聖境』（中華民國新民会、発行年不詳）。（一）写真、（二）事変後の五台山、（三）五台山の沿革、（四）新民会的使命といった章立

てとなつていて、写真には「五台山六月大会盛況」「五台山六月大会実況」「新民会工作之一部」といったキャプションが付されている。なお、新民会とは、日中戦争後、日本軍が樹立した中国臨時政府を擁護するために設立された中国民衆教化団体である。

華北交通というのは、昭和十四年（一九三九）、日本の国策と連携して、南滿洲鉄道、いわゆる満鉄の流れを汲んで設立され、鉄道・バス・水上交通など、華北地方の交通の開發と運営を行い、旅客や資源の輸送を担っていた特殊会社である（華北交通アーカイブ作成委員会「華北交通アーカイブ」、京都大学地域研究統合情報センター、<http://codh.roisac.jp/north-china-railway/>）。

酒井眞典は、酒井紫朗ともいい、和歌山県出身の真言宗僧侶で、野山大学文学部密教学科を卒業後、古義真言宗の内地留學生として、昭和八年（一九三三）五月から東北帝国大学法文学部西蔵語専攻科に進み、その後、昭和十五年（一九四〇）四月から昭和十七年（一九四二）五月まで、高野山大学学長の藤村密懂の推薦によって、外務省文化事業部派遣の在支特別研究生として五台山に派遣された人物である。また、現地では山西省陸軍特務機関から無給囑託を命じられ、喇嘛僧と寝食をともにしながら、西蔵伝訳仏典や蒙古語の研究に従事したという。以上は、大澤広嗣「真言宗喇嘛教研究所の組織と活動」（中西直樹・大澤広嗣編『龍谷大学アジア仏教文化研究叢書』11 論集 戦時下「日本仏教」の国際交流」、不二出版、令和元年十二月）による。

菊地宣正は真宗大谷派の開教使で、陸軍特務機関の機関員として五台山に駐留したとみられる。昭和十五年（一九四〇）、日本仏教顕揚の資料を求めるため、菊地が一時帰国した際には、大谷大学で「五台山を語る」と題して講演を行っている（五台山駐留の菊池開教使帰る、「真宗」第四六一号、昭和十五年一月）。

酒井紫朗「宋磧砂版大蔵經に就いて」（『ピタカ』第八年第九号、昭和十五年十月）。なお、昭和十七年（一九四二）三月、興亜院宗教史蹟調査団として、興亜院文化局から依頼され、密教学者の吉井芳純、天台学者の松井聰順、中国仏教史学者の三上諦聰らが山西省の仏教

史跡調査を試みているが、その際、酒井らが発見した崇善寺の磧砂版大蔵經も調査対象となり、興亜院に調査報告を提出したことを吉井が論文に書き残している（吉井芳純「太原崇善寺発見の磧砂版蔵經に就いて」、「密教研究」第八十号、昭和十七年）。なお、その時期は貫式の調査よりも一年ほど後であり、また吉井に同行した三上は、貫式と同じく西本願寺から派遣された興亜留學生の一人であったが、貫式の崇善寺での調査活動について、吉井は一切言及していない。

以下、該当箇所を引用しておく。「山西省の仏教史蹟と云つても、之を全般的に調査する事は、一人や二人の力で短期間に到底なしとげられるものではない。殊に時間と経費とに限度のある調査旅行に於ては、予定のコースを終了出来れば、最大の成績を収め得たものと言はねばならない。今次調査に於ける私の目的は、太原を中心とする史蹟の踏査であつた。此の附近は従来も先達の学者に依つて、紹介されてはゐるが、尚多くの問題を残してゐる事は周知の通りである。私の調査コースは、交城県—玄中寺—晋祠鎮—太原原—古太原（晋陽城）—明仙峪法華寺—風峪—崇輻寺—太原の順に、約一箇月を費して現地皇軍の絶大な協力を得て、とにかく予期以上の成果を挙げた事が出来たのである。この調査の概要は、四月二十一日に北京景山東街の東亜文化協議会で発表したし、別に興亜院に調査報告書をも提出しておいた。ちなみに、吉井は昭和初期、日中戦争が勃発する以前から、金剛峯寺留學生として北京大学に留学しており、中国政府要人とも親交があつた。

注18史料紹介を参照のこと。

『朝日新聞』北支版の昭和十六年（一九四一）九月二十七日号の本文は以下の通りである。「山西省にあつて支那仏教史を専攻する一留學生により世にも稀な經文、西夏文字その他得難い文献の数々が発見され、わが仏教、史学両界の間に貴重な記録として保存され、さらに各方面より深い研究がすめられるべく多大の期待がかけられてゐる。発見された支那古代の文献といふのは金刻大方広仏蓮華經合論二「十九・貫式直筆修正」帖刊記、西夏文蔵經扉画断片、元管主八五台山施經秘密大乘經一「九・貫式修正」帖刊記、日本国僧慶政補刻大

(23)

(22)

(24)

(25)

(26)

(27)



- 方広仏蓮華經第二、拱二など計十一種、西本願寺留學生であり龍谷大学支那仏教史専攻の小川貫式氏はさきに山西省特務機関の依頼をうけ支那隨一の聖境五台山の碑文研究のため来原したが、ひきつゞき同山顯通寺住職、山西省特務機関嘱託菊池宣正師の援助をうけ太原市崇善寺に元版大藏經を踏査研究中はからずも右の貴重な文献を発見したのであつた。〔中略〕今回の発見により仏教文化史上に日華提携の貴重な資料を齎したものととして各方面より歓喜もつてむかへられてをり小川氏の帰国後学界ならびに仏教界に発表される予定である、なほ十一種の文献はかく太原博物館に保存されることとなつた。見出しの表現からは、貫式が五台山で新たな発見をしたかのように受け取れるが、本文の内容から貫式が発見した十一種の經典類は五台山ではなく、崇善寺で発見されたものとわかるし、貫式の崇善寺の報告書にもこれらが発見されたことが書きつけられてゐる(注18史料紹介を参照のこと)。なお、貫式の山西省入りは特務機関からの依頼であつたと報じられてゐるが、「小川貫式資料」にはそのことを具体的に裏付けるものは存在しない。
- (28) 太原近郊には他に、天龍山石窟や玄中寺という、常盤大定や閔野貞らによつて発見された、中国仏教史上、特筆すべき仏教史跡があるが、「小川貫式資料」を見るかぎり、貫式が訪れた形跡はない。
- (29) 海外開教要覽刊行委員会編『海外開教要覽(海外寺院開教使名簿)』(海外開教要覽刊行委員会、昭和四十九年三月)。
- (30) 太原府城は、古く春秋時代、晋陽城として現在の太原市晋源の地に建てられたことに始まる歴史ある古城である。北宋時代に汾河の東岸にあたる現在地に移されたが、さらに明時代になって規模が大幅に拡張され、これが現在の太原市街に残る太原府城跡に対応する。
- (31) 華北交通アーカイブ作成委員会「華北交通アーカイブ」(京大大学地域研究統合情報センター、<http://codh.rois.ac.jp/north-china-railway/>)。文瀾公園一帯はもともと低湿地帯だったらしく、明時代には海子堰と呼ばれる堰を設けて太原府城内の洪水被害に備えたとされる。その後、清の光緒年間(一八七五―一九〇八)に水池を利用して庭園化が図られたとみられる。

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(四)

- (33) 高原一道は「高原機関員」「高原先生」として、貫式の崇善寺の報告書にしばしば登場する人物である(注18史料紹介を参照のこと)。
- (34) 『本願寺新報』第九三四号(昭和十六年八月五日発行)。
- (35) 『中外日報』第一二四三六号(昭和十六年二月五日発行)。
- (36) 藤谷道威もまた「藤谷主任」として、貫式の崇善寺報告書とスクラップブック貼付写真のキャプションにその名がしばしば見えている(注18史料紹介を参照のこと)。
- (37) 高原一道「五台山概観 附共產軍の迫害」(「教誨一瀾」第八六四号、昭和十四年二月)。「山西の共匪蠢く地に驚くべき支那念仏復興ノ玄中寺中心に湧き上るノ高原、藤谷氏らの大計画」(『中外日報』第一二七六二号、昭和十七年三月十日発行)。
- (38) 藤井由紀子・小川徳水「山西省玄中寺の復興と「小笠原宣秀資料」について―「小川貫式資料」の史料性をめぐって」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十七号、平成二十九年十二月)。
- (39) 道端良秀もまた、貫式の崇善寺の報告書に「道端教授」としてしばしばその名が登場する。おそらく学術的な関心が高かつたのだろう、事あるごとに崇善寺の調査現場に顔を出し、貫式らに教示を与えていたことが貫式の報告書からはわかる(注18史料紹介を参照のこと)。
- (40) 道端良秀「支那仏教調査報告概要」(『真宗』第五百二号、昭和十八年六月)。
- (41) 張紀仲・安笈編『太原崇善寺文物図録』(山西人民出版社、一九八七年)。
- (42) 『崇善寺』(崇善寺、一九九二年)。
- (43) 科研プロジェクトは三年間であり、海外調査費が捻出できる期間は極めて限られてゐる。
- (44) 以下、太原博物館の館史はすべて、山西省博物館編『山西省博物館八十年』(山西人民出版社、一九九九年)による。
- (45) 『太原博物館案内』(山岡部隊内山西文化保護会、昭和十五年十一月)。
- (46) ただし、この昭和十五年発行の博物館案内は改訂版で、それより以前、昭和十三年(一九三八)八月に、同じく山岡部隊内山西文化保護会によつて初版が発行されている。なお、戦争下での太原博物館について詳しく論じたものとして、徳永智「日中戦争下の山西省太原に

(45) おける博物館保護」(『MUSEUM』第六七七号、平成三十年十二月)を挙げておきたい。

注18史料紹介。なお、深尾は博物館に関与する以前、山西省で鉞山経営に携わっていたらしい。そのため、鉞石などを展示物とする自然科学部の幹事に就任したとみられる(深尾大三郎『山西鉞産概況』、北支派遣軍阿南部隊、昭和十四年)。

(46) 占領時代の日本人関係資料は未整理のため、調査には準備が必要とすることで、『皇紀二千六百年度水彩画推奨記録作品集』など、数冊を例示して書庫から出してくださったほかは未確認で、次回の調査までにある程度、整理して準備を整えておいてくださる約束となった。代わりに、占領以前のものとなるが、『山西省立民衆教育館月刊』中華民国二十三年(一九三四年)十一月発行号などを拝見し、写真撮影もさせていただいた。

(47) 崇善寺の調査について安海氏に相談してみたところ、隣接はしていても寺院と博物館とはその立脚するところが違い、寺院の経蔵に収められている大蔵経を文化財として調査することは難しく、調査実現を簡単には約束できないとの言があった。

(48) 現在は外国人が経営する「THE PEERL」というライブハウスとして、その特殊な空間が再利用されている。